

実習指導室の充実に関する研究（その1）

－現状と課題－

森崎麻衣子 木村匡登 井上浩義

A Study of fulfilling practical training room.

～ Current status and issues ～

Maiko MORISAKI, Masato KIMURA, Hiroyoshi INOUE

はじめに

子どもの保育・教育を取り巻く社会的環境が著しく変化してきたことを踏まえ、専門職が担う役割が多様化してきたことは周知のことである。そのため、保育者養成校には、これまで以上に実践力のある保育者養成が求められるようになってきた。その実践力の育成においては、「保育実習」「教育実習」（以下、実習と表記）は極めて重要な意味を持つ。

そのような中で、国は保育者養成のカリキュラムを改訂し、実習指導内容の充実を強化してきた。また、全国保育士養成協議会は実習と実習指導の研究を幾度と実施し、全国的に保育士養成における実習指導の標準化を示す「保育実習指導のミニマムスタンダード」の作成（2005年版、2017年改正版）を行ってきた。

このように、実習指導の充実は、保育者の質の向上の上でも重要な課題であり、いずれの養成機関においても独自の取組により充実を図ろうとしている。一方で、学生においては、実習は大きな試練であり、自らの職業適性を見極める場ともなり、その不安感は非常に大きい。現在の実習指導においては、指導案の作成や実習日誌の書き方、事務手続き、実習後の振り返りなど広範囲な指導が行われているが、これらの指導に加えて、学生の心理面へのフォローなども必須のものとなってきた。しかし、授業としての「実習指導」の時間内で、これら広範な指導を行うこと、さらには課題を持った学生を含め、個人に合わせた指導を行うことは大変困難となっている。そこで本学は授業時間内に限らず、実習に関する指導を全

般的に行うことのできる実習指導室を 2017 年度より設置し、実習助手による学生への心理的サポートを含めた支援を行うことができるよう環境整備がなされた。

本稿においては、実習指導室開設から 3 年間の利用状況を総括し、実習指導室のさまざまな効果について検討する。それによって、今後の実習指導の充実を図りたい。

I 本学の実習指導教育体制とその沿革について

本学保育科は短期大学 2 年課程の 1 学年 210 名（2 学年合計 420 名：定員表記）の保育者養成（幼稚園教諭免許、保育士資格取得）を中核とする保育に関する理論・技術を学ぶ学科である。

特に本学では実践力を重視した保育者を育成するためのカリキュラムが構成されている。学内では、講義・演習等を通して保育専門職に必要な知識・技術を学び、学外においてはこれらの知識・理論・技術を統合的に学ぶため、「保育実習」「教育実習」を行っている。段階的な学びの機会として、実習指導の一環ではあるが、入学直後に学外における「見学実習」を実施し一日体験的に保育・施設の場において、子どもと関わる楽しさや保育者の仕事のやりがいを知る機会を設けている。また、夏季休業中や冬期休業中における「体験実習」においても自身が担当されている実習先を中心に多様な保育の現場を知り、様々な保育の考えや方法を知る機会を設けている。

これらの実習を実施するにあたっては学内外において「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ」「教育実習前後指導」が 2 年間を通して行われている（図 1）。

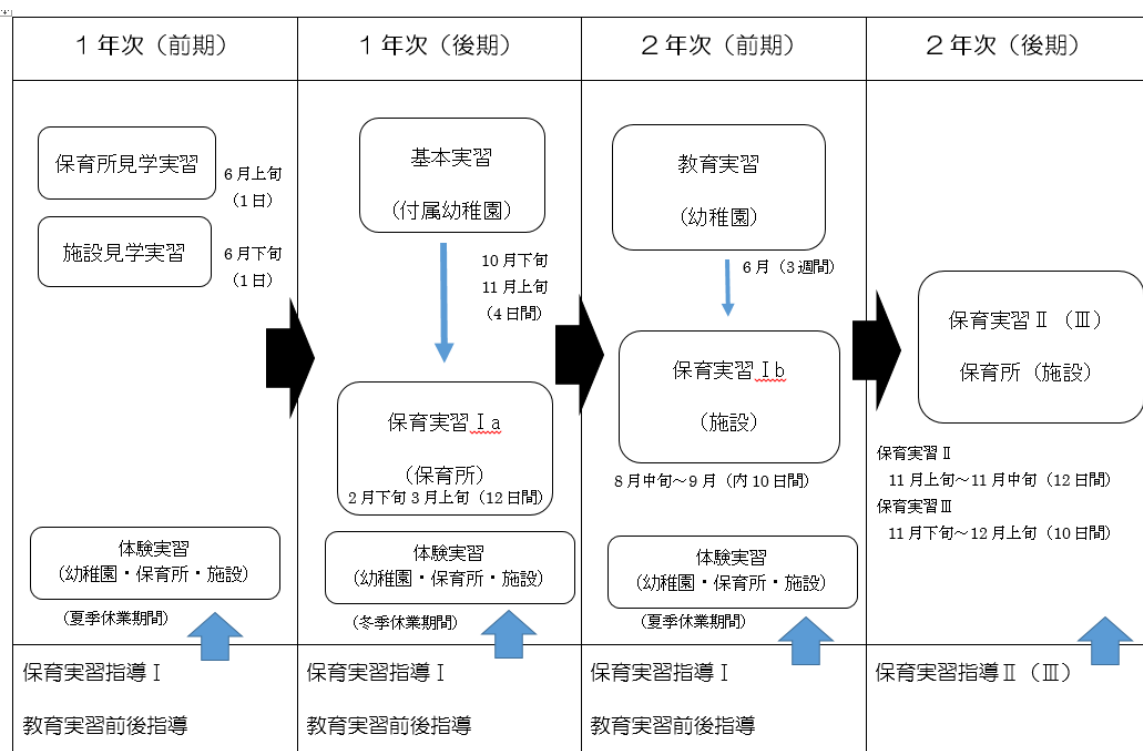


図 1 2 年間の実習の流れ

これまで、1 年間に 2 学年併せて 400 名超の学生を指導する実習指導教育体制については、実習指導主幹を中心に実習指導主任が置かれ、学級主任とともに実習指導を保育科全教員体制で行ってきた。また、実習指導室設置以前は教務部実習指導係が事務的手続きを含め、実習指導教員と連携し、学生、実習先との窓口として機能してきた。全国的にも保育者養成の根幹は実習指導を円滑にすることが養成校の課題であることを認識しており、実習指導室や実習センターは、各養成校で整備され、運営されているのが実情である。そのような中、本学においても、2017（平成 29）年度以降は、実習指導室にて実習助手が教務部実習指導係りの役割を担うこととなった。

また本学は実習に関わる「実習ケア体制」を構築しており、実習前指導から実習中（訪問指導）、実習後指導の学生へのフォロー体制が確立されていたが、実習指導室が基幹的な機能を果たし、実習先、学生、教員をつなぐ役目を担うこととなっている。

言うまでもなく、国が示す保育の専門性を高める保育者養成において、その効果的な実習指導教育体制を構築することは必要不可欠である。そのために、これまでの実習指導教育体制において本学の課題を整理したものが以下に挙げられている 3 点である。

- ①実習施設に関する資料やこれまでの記録が蓄積・活用されていない
- ②実習を通して学生が体験する不安やつまずきへのフォローが担当や学級主任のみになり、組織的に共有・対処されていない
- ③学級主任を含めて有機的役割分担ができていない

これらの課題への対応を含め、実習指導教育体制の強化には実習指導室の設置および実習助手の配置は必置の要件であった。

2017（平成 29）年設置当初は、個人研究室の一部屋に実習助手 1 名の配置であったが、2019（令和元）年には、本学新館に場所を移し、部屋の広さも 3 倍以上のスペースを持つ実習指導室が設置され、実習指導室は「地域連携・実習指導室」と名称変更となった。その地域連携・実習指導室には実習指導室長 1 名実習助手 1 名の配置がなされ、実習指導教育体制の充実化が図られた。

実習指導室では、直接学生にかかわるものとして、①実習にかかわる手続き窓口（実習指導にかかわる提出物の提出窓口を含む）、②実習先情報の整理・保管により、学生がその情報の閲覧、③保育に関する図書・雑誌・資料（指導案、日誌、実習報告集など）の整理、保管により、学生が実習準備を円滑に行うことを支援することが可能となった。また、上記①～③をメンタル的にもテクニカル的にもサポートできる実習助手による指導・支援がある。

そして、実習助手は、①実習指導準備室等において、面接を通して、学生への実習指導支援（日誌、指導案、製作物、相談や不安への対応など）②実習先との連絡調整（実習指導者会の準備含む）、③実習指導教員（学級主任）、事務局との連携が円滑に行われるよう、その役割を遂行している。実習指導室で実習助手による指導・支援や実習に関わる情報の入手から実習に関わる手続きまでを円滑に行うことが可能となった。

Ⅱ 実習指導室の設置 3 年間の利用状況

2017（平成 29）年から 3 年間の月ごとの利用者数の推移を表 1・図 2 に示す。

表 1 月ごとの利用者数の推移

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保育科1年	平成29年度	8	95	53	25	25	1	40	14	39	78	30	17
	平成30年度	32	83	71	12	16	0	46	23	9	61	12	2
	令和元年度	36	84	65	8	3	0	10	5	21			
	平均	25	87	63	15	15	0.3	32	14	23	70	21	9.5
保育科2年	平成29年度	68	45	15	106	65	7	64	33	52	36	19	1
	平成30年度	90	49	26	42	50	11	54	12	0	7	12	0
	令和元年度	26	5	10	23	10	3	32	25	3			
	平均	61	33	17	57	42	7	50	23.3	18.3	22	16	0.5

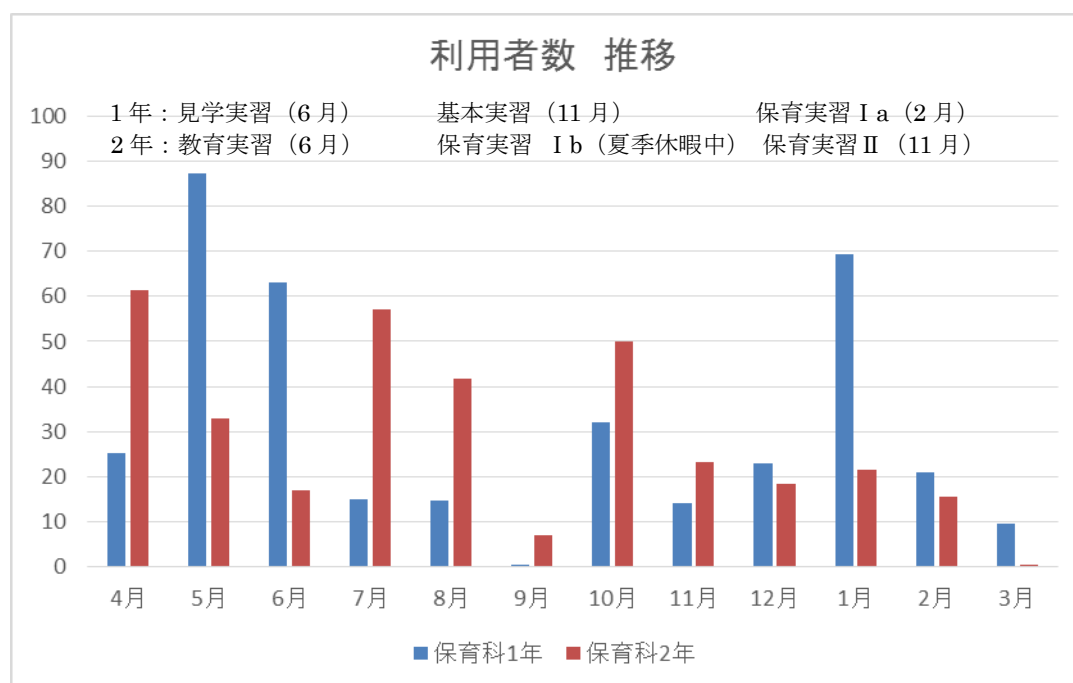


図 2 月別利用者数の推移と実習

各学年共に、実習のある月において利用者が増加する傾向が見られた。1 年生では、初めての見学実習（6 月）が実施される 5・6 月、基本実習（11 月）が実施される直前の 10 月、保育実習 I a（2 月）実施直前の 1 月に利用者が増加している。2 年生では、教育実習（6 月）前の 4・5 月、保育実習 I b（夏季休暇中）前の 7・8 月、保育実習 II（11 月）直前の 10 月に利用者が増加する。このように、実習の開始時期等の理由から、利用は一時期に集中することが多い。これらの傾向は、阿部（2010）と同様であった。

次に、利用目的について、年度ごとにまとめたものが表 2 である。学生の利用目的は大別すると、資料の閲覧、相談、実習に関する諸手続きの 3 つに分類できる。

表 2 利用目的

	平成29年度				平成30年度				令和元年度			
	保育科1年		保育科2年		保育科1年		保育科2年		保育科1年		保育科2年	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
閲覧	4	0.9%	36	7.0%	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.7%
確認	2	0.5%	3	0.6%	1	0.3%	2	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
指導	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	6	1.7%	0	0.0%	0	0.0%
相談	191	44.9%	151	29.5%	154	42.0%	164	46.5%	117	50.4%	47	34.3%
提出	119	28.0%	111	21.7%	134	36.5%	71	20.1%	89	38.4%	16	11.7%
訂正	0	0.0%	1	0.2%	1	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
手続き	13	3.1%	56	11.0%	3	0.8%	7	2.0%	2	0.9%	15	10.9%
書類取り	82	19.3%	128	25.0%	66	18.0%	81	22.9%	14	6.0%	19	13.9%
報告	12	2.8%	15	2.9%	5	1.4%	17	4.8%	2	0.9%	28	20.4%
訪問挨拶	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	1.1%	1	0.4%	6	4.4%
無記入	0	0.0%	7	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	0	0.0%	3	0.6%	1	0.3%	1	0.3%	7	3.0%	5	3.6%

利用者の約半数が、相談のために実習指導室を訪れていることがわかる。とりわけ、1年生でその傾向が強い。1年生にとっては、実習に関すること全てが初めてであり、不安が高い。その不安の解消に実習指導室が果たす役割の重要性が示唆される結果となった。

実習指導室の効果

実習指導室が設置されて3年が経過したわけであるが、学生の中でどのような効果が得られたのであろうか。毎年実施される学生生活調査において、「困ったことや悩みを相談できる教職員がいますか」という項目がある。実習指導室が設置された平成29年度以降の結果を図3に示す。

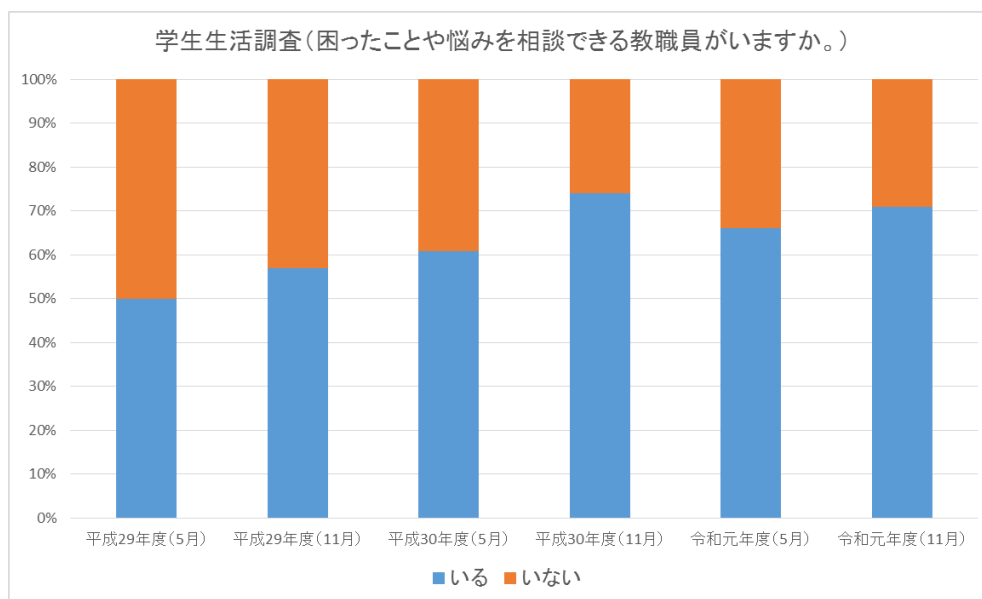


図 3 相談できる教職員の有無

図3より、相談できる教職員がいるという回答が年々増加していることが見て取れる。この結果は、その全てに実習指導室が寄与しているというものではないが、学生生活において、保育科の学生の悩みの多くが実習に向けての不安や心配、保育技術の不足といったものであることを考慮すると、実習指導室が存在し、実習に関する悩みは全てワンストップでそこで解決することができるという環境は、学生の不安軽減にとって大きな助けとなるのではないだろうか。

では、実際に実習指導室にはどのような相談がなされるのであろうか。

(相談事例)

地域連携・実習指導室（以下、実習指導室と明記）は常駐する実習助手と個別に話ができる場所である。このため、実習の話を行っているうちに学生が本来抱えている悩みが見えることがある。深刻な場合はカウンセリング的相談支援を行い、本人の同意のもと関係機関との連携も必要となる。ここでは、そのような事例を3件紹介する。

(事例1 家庭環境から勉学に集中できない学生)

学生Aは、1年次、提出しなければいけない書類の期日を守れず来室、その際に理由を聞くと母との関係に悩みがあること、金銭面で悩んでいること、課題を行える家庭環境にないことの悩みを抱えていた。実習に関して「実習期間中にアルバイトができないのは生活資金がなくなるのでアルバイトをさせてほしい、日誌を毎日提出できるかが不安」と涙ながらに言う。実習を行うには守らねばならないことがあることを伝え、日誌に関しても継続して支援していくこと、悩みがあるときはいつでも来室するよう伝える。月に1～2回程来室するようになり、彼女の精神安定を優先し、あえて家庭環境にふれず何気ない会話で終わる日や、実習に関しての提出書類の確認作業で終える日もあった。話を聞いてほしい時は、自ら話せる環境作りに努めた。学生A自身も家庭環境からくるものと思われるが情緒不安定であった。相談回数を重ねるごとに、彼女自身が気づかねばならないこともあり、本人同意のもとカウンセリングへ繋げ、関係機関とも連携を行うこととした。実習前には個別に呼び本人の状態把握・提出物の確認・家庭環境の確認を行い実習へ参加した。2年次になると将来について語るようになり、就職にむけての話が多くなる。意欲を持ち続けるよう励まし、助言を行うことで笑顔が見られるようになる。すべての実習を終えると来室回数も減り、時折「元気ですか」と話を聞いてほしい時に来室するようになる。自分自身の身の上を開示したことにより普段の様子と来室した時の様子に若干の態度の違いが見られるが、困った時に訪れる場所になっていた。2年間苦悩の日々を送ったが就職もきまり「いろいろとありがとうございました。大丈夫ではないけど大丈夫です」「また、聞いて下さい」と最後は、はにかんだ笑顔が見られた。

(学生Aから見えること)

授業での実習指導は集団指導であり学生の個人的な話を一人ずつゆっくり聞くことができない。それに対し実習指導室は個々で話ができる良さがあり、筆者は、学生の心に寄り添い本人の想いを大切にすることを心掛けている。また、威圧的ではなく相談しやすい環境を整えることが大事である。躓きの背景には必ず負の要因があり、それらに対して今なにをすべきかを学生自身が気づくように支援していくことが必要と感じる。実習相談に訪れる学生の中には実習を行える環境にない学生も多く、また、自らその環境を作り出す学生もいる。これらの学生の多くが実習中の躓きで分かることが多い。金銭的にも不安を感じる学生も多く、不安を抱えたままの実習は本来の学生の良さが見られない。実習前に不安軽減を行うと意欲をもち実習に臨むことができる。実習に集中できる環境にない学生のためにも実習指導室での個別対応は必要である。

(事例2 日誌記入に悩む学生)

学生Bは、実習指導の中にて「日誌の記入ができない、難しいので教えてほしい」と来室。どこが分からないか具体的に聞き、個別に日誌記入指導を行うことに。細かい作業が非常に苦手な様子。まっすぐ線を引くことができず、助言を行う。また、別日に面談を行う。非常に真面目な学生であるがコミュニケーションが苦手であり対人関係でも悩みを抱えていた。保育者になりたい、という強い思いがあることから苦手と思われることに重点を置き、個別指導を行う。「人前での手遊びやピアノはほんとに苦手で、焦ってしまう、頭が真っ白になる」「ピアノは練習するけどできない、できないのに弾かないといけないですか」と練習してもできないことに悩んでいた。実習を行いたいという意欲はある。また、家族の期待を裏切れないという思いも持っていた。言動から子どもの動きを予測して動く、臨機応変な対応は難しいと思われた為、現場での実習生としての動きも伝えていく。日頃の様子から資格取得は難しいと思われたが納得いく形で実習をやり遂げることが必要と感じ、保育実習担当教員・学級主任教員と連携のもと実習へ参加する。実習は研究保育も行い、欠席もなく行えたが保育者としての資質を問われ保育実習評価は「不可」となる。本学2年間で資格取得はできなかった。学生Bは日誌の記入ができないと相談に来たが、それだけでなくほかの悩みも抱えていた。学級主任教員と連携をとり慎重に実習を見守ることが必要である。今後は、資格取得のために再実習を臨むか、という話を行っていくが決断には時間を要する為、彼女に寄り添い決断できるようにする。

(学生Bから見えること)

実習前に、手遊びのコツ、ピアノのコツを伝え励まし自信はつくが実際の実習現場にて躓く可能性は十分に考えられた。その後の残りの実習日にも大きく影響することが考えられたため、励ましその場でだけでの解決支援では成長はなく、自分自身を知ることが必要と感じた。「練習したができない」「保育者になりたいがなれないのではないかな」こういった悩みを

打ち明ける学生は多い。家族に心配かけまいとギリギリの精神状態で過ごしている学生も多くみられる。最初の本実習を終えると夢と現実とのギャップに戸惑う学生もいる。実習指導室は学級主任へ言えないことを思いきって話すワンクッションの場所となっている。

（事例 3 自分の意見を保護者に言えず悩む学生）

学生 C は、明るく社交的な学生であるが約束を守ることができず普段の授業から欠席が多く提出物も遅れていた。来室目的は提出物遅れの謝罪であった。謝罪も楽観的であったため指導を行う。その際、本人の口から「私は向いてないと思う、保育者になりたくない」と話す。また、家族に話すと「絶対に資格をとるよういわれたから辞めることができない」とのこと。きちんと自分の気持ちに整理をつけて実習を行うか決めるよう伝える。数日後、「実習には行くしかない」と来室。理由は「母親からとる（資格取得）ように言われたから」と話す。本人の意思確認のもと、今までできていない実習準備を行うこととなる。提出物は期限内に提出すること、実習中の約束事等を個別指導し実習へ参加する。しかし実習中に実習ルールを守ることができず実習途中で引取りとなる。その後、学級主任教員より家族へ現状を伝え、今後についても話をするに。資格取得に関しては母親からの願いもあり本人も納得した形で再実習を行うこととなる。再実習にむけて必要な手続きを行う際に再度、本人から「向いてないのに、いかないといけないですか」と相談がある。授業欠席や、提出物遅れは本人なりの精一杯の反抗だが、それでは解決にならないことを話す。「辛いと思うが、自分の思いは自分できちんと伝えるしかない、私が話をしても最後には自分と母親とが話すこと」「今のままでは全てが中途半端になる、自分だけの気持ちだけでなく母親の気持ちも考えること」時間をかけて話す。そして、もし実習に行くと決めたら決めたのは自分である、人に迷惑をかける行為は恥ずかしい事だと話す。時間はかかったが少しずつ心情に変化が見られるようになり、覚悟を決め再実習に臨むことができた。

（学生 C から見えること）

実習前に学生 C の気持ちをきちんとくみ取ることが重要であった。本人に資格取得の意欲がなかったこと、家族間での話し合いがうまく行っていないことへの根本となる原因解決が必要であった。両親に言われたまま、特に夢がなかったから受験した、という学生もいる。また、学生 C のように言っても聞いてくれない、という学生は自分でどうにかできない葛藤から授業欠席やルールを破るといった行動がみられる。こういった学生は保育士の資格がどういったことに役立つかを知らない学生も多い。実習は保育園、幼稚園、施設と自分に合った職場を見つける場にもなる。それらを伝える為にも実習指導室は重要な役割を担っている。

（相談事例からの考察）

実習指導室には、実習以外でプライベートな悩みを話す学生も訪れる。特に家庭環境は学生が話さねば分らず深刻な状況にも関わらず、なにくそ根性で困難な状況に打ち勝っている

学生や、心と体のバランスを取ることが難しい学生も多い。ただ、頑張っている学生が何もないかということそうではない。やはり、頑張りの限界が来る。1度来室した学生は必ず再度訪れる。来室者のほとんどが‘聴いてほしい’という願いがあることから、まず聴き役に回することで次へ繋がるように心がけている。実習実務や指導案記入の相談支援は比較的行いやすく、2～3名の友人同士で来室するためお互いに刺激を受けながら指導案作成等を行う。学生同士で考えられるうちは見守り必要時のみ助言を行っている。このようなときに実務経験者からの助言は非常に重要と考える。実習先との価値観の違いや、保育者としての思いも実習では躓きの原因になりやすい。学生の気持ちをくみ取ったうえで、状況を詳しく聞き助言することが臨まれる。個人情報を含む相談内容となるため守秘義務についても学生にも伝えていくことが重要である。また、深刻な状況では、やはり保護者との連携も欠かせない。保護者からすると学生は子どもであり、子どもから聞いた話で不安になることもあれば過剰反応してしまう保護者もいる。事前にトラブルを回避する為にも、実習で何かあればまず実習室へ相談する。という流れを作る事で実習先、保護者との連携も行いやすくなる。相談場所が必要である。学生が悩みを抱えているまま、不安に思っているまま実習を行うと、実習先からは‘学校は把握していなかったのか’といった不信感をもたれる可能性もある。家庭からはただ責められるという状況にもなりかねない。そういった状況を作らない為に実習指導室は活用できる。また、前述のように相談内容は多岐にわたり実習先からは思いもよらない相談内容の電話もある。相談業務と現場経験のある教職員の連携が必要である。非常に重要な責務をかかえるため、実習助手は常に学び続ける姿勢が必要である。実習指導室の役割は、事務作業・実習指導・実習相談と多くある。本学の実習指導については把握する必要がある、学生個人の相談だけではなく、実習先との連携、場合によっては保護者連絡も必要となる。現場経験はもちろんのこと相談業務に関しては学び続け活かすことが必要である。そうする事で実習指導室の役割がよりよいものになる。来室者人数や多様な相談内容の存在は実習指導室が果たしている役割の大きさを示している。実習指導室はなくてはならない存在であり、実習指導室での役割の向上を目指すことで保育士としての質向上に繋がると考察する。

Ⅲ 実習指導室に関するアンケート調査から見えるもの

曲田ら（2015）は、実習指導室の利用に関して、学生の率直な評価を調査するためアンケートを実施しており、そこでは実習指導室の効果と学生生活全般をサポートするという役割の拡大が求められていることを考察している。そこで、本学の実習指導室の効果と役割について検討することを目的とし、アンケート調査を実施した。調査は以下の方法で行った。

【方法】

実施日	2020年1月31日（金）～2月4日（火）
実施方法	UNIVERSAL PASSPORT による Web 回答
対象	保育科1・2年生 399名（休学者等含む）

186 名が回答（回収率 46.6%）

質問項目

- ①「実習指導室があって良かったと思いますか？」 4 件法で回答
 ②「①でそう回答した理由」 自由記述
 ③「今まで実習指導室を利用したことがありますか？」 ある・ない
 ④「実習指導室に対して、どのようなイメージを持っていますか？」
 ⑤「今後、実習指導室に希望する支援や設備等について」 ④⑤自由記述

【結果】

「実習指導室があって良かったと思いますか？」という設問に対し、図 4 に示すとおり「とても良いと思う（105 名：56.5%）」「良いと思う（74 名：39.8%）」と、96.3%の学生が高評価しており、学生たちにとって実習指導室が必要な存在であると認識していることが示唆された。

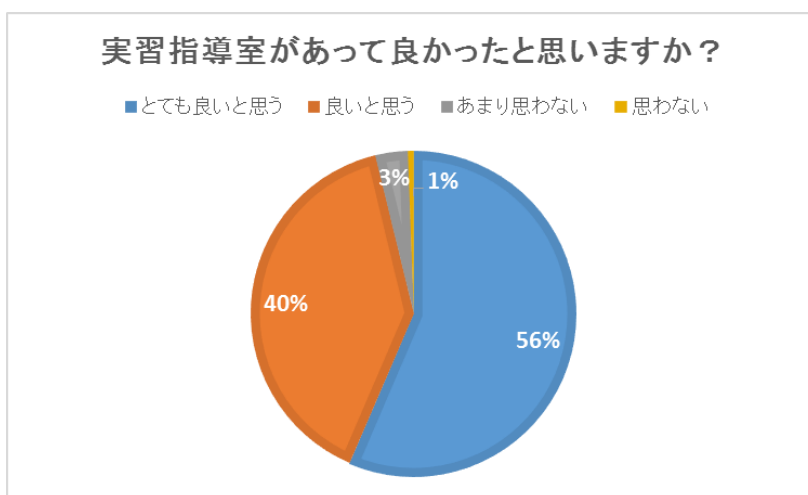


図 4 実習指導室の利用に関する学生の評価

高評価した理由について、自由記述からは「実習のことを相談しやすい」「実習先についてわかる」などの回答が多く、実習に関する悩みや疑問を相談し、解消できる場所との認識ができていることがわかる。加えて、「アットホームで丁寧に教えてくれる」「居心地のいいところ」「相談しやすい」といった回答も多く見られ、相談を受ける実習助手の存在も大変重要であることが示唆された。

また、一方で、「思わない」「あまり思わない」と回答した学生の理由には、「利用したことがない」「活用しなかった」との記述が全てであり、まずは全ての学生に利用を促進することが求められることが示唆された。実際に実習指導室を利用したことがあるかという問いに対しては、75.8%（141 名）が「利用したことがある」と回答し、「利用したことがない」という者は 24.2%（45 名）であった。つまり、実習指導室の有効性については理解しているが、利用したことがない学生も存在するという結果である。では、なぜその効果を知って

いるのに利用しないのだろうか。

実習指導室のイメージについての自由記述では、その大部分が相談しやすく、優しいといった好意的なイメージを持っているが、少数ではあるが「指導される部屋」「めんどくさい」「緊張する」「真面目」「必要なときに閉まっている」「入りづらい」といったネガティブなイメージを持っていることがわかった。特に、令和元年度から部屋を移転し、ガラス張りの入り口となり、室内で指導をしている姿が他の学生から見られることで、気軽に立ち寄れる場所というイメージがもてない学生が存在することが示唆された。気軽に訪れることのできるオープンな雰囲気と、周囲の目を気にせず相談できるクローズドな環境という異なる2つの空間を実習指導室内に設けることが必要であると考えられる。

IV 今後の課題

これまで本学の実習指導教育の体制、実習指導室設置の背景、および3年間の実施状況について、個別事案および実習指導室の利用に関するアンケート調査を学生教育の視点から実習指導室および実習助手による指導の効果について考察してきた。実習指導室が担う役割の1つは学生が不安なく実習が行えることである。そのためには授業等で何が不安か（何が課題か）が明らかにされ、その不安や課題の解消に実習助手による具体的助言、励ましがあり、学級主任を含め教職員一丸となって学生の成長を共に見守る仕組みが必要となる。

実習指導室が基幹的に機能し、充実した指導教育ができるためには、実習指導教員、学級主任等との連携を図り、「実習指導内容」を充実することや、事務的手続きを含めた事務局との連携、実習先との調整を一括的に行い、的確に学生に伝えられる「環境面」の整備が必要不可欠である。具体的にその課題として考えられることとして、「実習指導内容」については、学級主任を含めた実習指導を担当する複数の教員の指導力の向上と標準化に資する「実習指導マニュアル」の作成、「実習指導計画（年間授業計画）」の深化などが挙げられよう。より組織化し機能化するための環境整備として、きめ細やかな実習指導ができる実習指導体制の強化（学生がいつでも気軽に利用できる実習準備室として、相談や資料閲覧、手続き書類の提出等などができることとカウンセリング等を必要とする個別事案の対応ができる面談スペース等の整備）が挙げられよう。それらについては、継続的に研究を重ねていきたい。

おわりに

本研究では、学生の実習指導教育に力点を置いた実習指導室の機能と役割について考察してきた。個別事案であげられたように、個別的にも時間的にも要する学生が多くなってきた。そのような多様化してきた本学の学生指導において、より丁寧に質的な保証を担保するためには、改めて実習指導室における実習指導の充実化の必要性を強調したい。

実習を含めた大学教育の中で学生が経験する動揺・葛藤・不安・迷い・挫折感などの「ゆらぎ」は、通常、克服すべき負の過程として捉えられてきた。専門性を身につける上で、到達すべき目標は、ややもすればゆらがない、確固とした自己を確立することと捉えられてい

る。しかし、専門性の獲得へと到る道筋は、「ゆらぎ」と「気づき」の連続性の中にこそその深化があり、保育者としての専門職の資質は、子どもと並び合う位置関係の中（つまりは実習）で培われるのである。その「ゆらぎ」と「気づき」に的確に関わることが実習指導室では可能なのである。

児童を取り巻く養育的環境は、時代の移り変わりと共に複雑・多様化する一方である。児童虐待、引きこもり、不登校、発達障害児の増加などに見られる児童福祉問題は、児童の生命、人生を疎外する危機的状況に置かれているのがしばしばである。

それらの問題をよりよい方向に導き、解決の糸口を見つけるためには、保育者の専門性が問われる事になる。それは良き保育者の育成を目指すことであり、未来を生きる子どもたちの最善の利益を守る事に他ならない。その保育者を養成する本学の使命は大きいと考える。

引用・参考文献

□阿部直美 (2010).「実習指導室の役割に関する考察－実習指導室・幼稚園実習担当活動報告を通して－」大阪樟蔭大学紀要 第9号, p. 145-154

一般社団法人全国保育士養成協議会 (2018).「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2 「協働」する保育士養成」中央法規, 2018

曲田映世・中西利恵・石沢順子 (2015).「多様な学生に対応した実習指導室の役割－教職員の「協働」による効果的な実習指導方法の検討－」相愛大学研究紀要 第31巻, p. 29-37

森木朋佳 (2016).「保育実習準備室の役割－可能性と課題－」鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第46号, p. 23-39